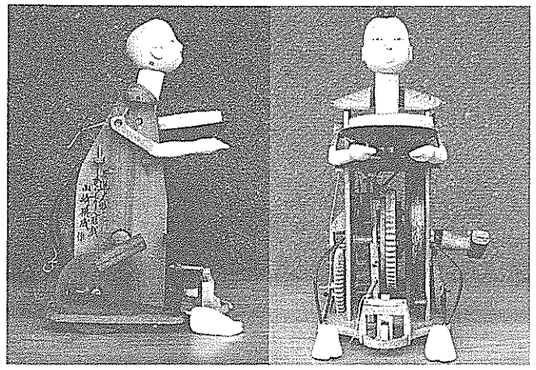
からくり紀行

猪野　吉保

ふるさと創生基金を活用して「ふるさと見聞録」が実施されています。広報ではこの事業を利用した皆さんのレポートを随時紹介していきます。

「からくり」といえば、何か不思議な意味を持つ言葉であります。辞書には「あやつる」「しかけ」「ぜんまい仕掛けであやつる人形」などと記述されています。

それは、外から見えないところに工夫された仕掛けにより、人形や物を動かし、見るものを驚かせる構造になっていて、日本では主として「芸能からくり」「時計からくり」「見せ物からくり」として発達してきました。



私は、子供のころから、手先を動かして物を作ることが好きで、四十数年前、東京上野にあります国立科学博物館を見学した際、展示棚の古ぼけた江戸時代のからくり人形が目に留まり、説明文を読みながら、これは動く人形であり、電池やモーターのなかった江戸時代によく作られたものだと驚き、その構造のおもしろさ、不思議さに取りつかれ、いつの日にか、ぜひ自分の力で復元してみたいと思うようになりました。

それ以来、出張や余暇を利用して資料を収集するうち、江戸時代には土佐にも細川半蔵（頼直）というからくり人形師がいたこと、しかも半蔵は南国市（旧長岡郡西野地村）の生まれであることも知りました。

それからは、半蔵の著書「機巧図彙」（からくりずい・一七九六年）の研究や、人形製作に必要な木材の収集や乾燥に万全を期してまいりました。

このたびの「からくり紀行」は細川半蔵に関する資料の収集と視聴覚教材（スライド）を製作して、あまり知られていない郷土が生んだ偉人伝を紹介することが目的であります。

最初に訪ねたのは日本における捕鯨の発祥地、和歌山県太地町立くじら博物館。

そこには、捕鯨に関する数々の歴史的模型・資料が展示され、特に私の希望していた文楽人形・からくり人形も展示されていました。

この博物館にはなぜこのような人形が展示されているのでしょう。おそらく、この地には鯨のひげという材料が豊富であり、また鯨が回遊してこない時期には、漁師たちにも時間的余裕が多かったため、ひげの利用方法がいろいろと考えられたからだと思われます。このことは文楽人形に利用され、からくり人形へと応用されていったことでしょう。

江戸時代、土佐においても隔年ごとに幡多地方で活躍した室戸の鯨漁師たちは、子供たちへの土産として仕事の余暇に、捕鯨・鯨車・木曳き人形などを作ったことが史実として記録されています。

ここで文楽人形について少し紹介します。大阪に伝わる人形浄瑠璃「文楽」は、あやつりによる目・耳・口の動きやかすかなうなづきは人形を泣かせ、笑わせ、そして、憂いの世界へと導き、ファンにはその人形の表情がたまらない魅力となっております。

その微妙な表情の秘密は、人形の頭部に仕掛けられたバネ（材料鯨のひげ・長さ七センチ・幅一～二センチ・厚さ一ミリ）にあります。ところがそのバネは、現在捕鯨禁止の影響を受けてその数が激減しています。そのため、代用にと最先端科学「セラミック」を使用したようですが自然の持つ弾力性・強靭さ・軽量には及ばないようです。

東京の「たばこと塩の博物館」、宮城県牡鹿半島の先端に位置する鮎川町の町立くじら博物館を見学。

新潟県長岡市の長岡歯車製作所では、歯車製造に関して、非常にユニークな会社であり社長は大学の講師もされながら、数々の歯車に関する特許を持っており、また会社は歯車の製造に携わる一方、江戸時代からの日本独自の木製機械器具やからくり玩具までの一大展示場でありました。中でも圧巻なのは、シャーシー以外はすべて自社の金属製歯車を駆使して「機巧図彙」を設計図とした茶運び人形でありました。江戸時代ないしは現代においても「機巧図彙」は設計図としていかに優れていたかを伺い知ることができました。

ふるさと見聞録

次は金沢市に向い、江戸時代のからくり師大野弁吉の遺品を収集している栗森長大氏を訪問しました。

大野弁吉は細川半蔵の「機巧図彙」（一七九六年）が世にでた五年後、一八〇一年の生まれであるといわれています。

栗森氏の所蔵されている大野弁吉の遺品は、学会からも高い評価を受け、関係図書にもその遺品が収録され、研究者の来訪をたびたび受けています。このように、一人の作品が一人の篤志家により収集されている例は珍しいことではないかと思います。

高知県においても、一九七七年（昭和五十二年）、今は故人であります城田政治氏の収集品の中より一体のからくり人形が発見されました。これは非常に貴重なもので、郷土の生んだまぼろしのからくり人形師、細川半蔵の唯一の遺品であるといわれています。なお、このからくり人形は、県立郷土文化会館に所蔵されておりますので、ぜひ一見していただきたいと思います。

日本におけるからくり列伝は、十五世紀から十九世紀末、豊田佐吉の自動織機をもって最後となりますが、南国市にいた先人の偉業を紹介し、顕彰することは郷土を知り、郷土を愛する上で大切なことだと思います。

今回の研修で四十年間の研究の中での空白部分を埋めることができました。

子育て広場

もうすぐ一年生

―希望と喜び持たせる会話を―

家庭教育学級専任講師　秦泉寺　千津

いよいよ四月から新一年生。親も子どもも希望と期待でいっぱい。新しく大きな一歩を踏み出します。

その一方で、「うちの子はみんなとちゃんとやっていけるだろうか」「先生のお話がきちんと聞けるだろうか」などと心配もされていることでしょう。入学を間近にした子どもへのかかわりなど心掛けたい点を述べてみます。

○　からだと心の準備

楽しい学校生活を送るためには、なんといってもからだや心が健康でなければなりません。入学前の健康診断でお医者さんから、むし歯や目、耳、鼻などの病気、皮膚の疾患など指摘されたら早めに治療しておきましょう。

心の準備としては、学校生活への期待を持たせ入学の喜びを話し合うことが大切です。「もうすぐ一年生になるね―」と家族みんなが笑顔で喜びの声かけをし、学校は楽しいところ、優しい先生やお兄さんお姉さんが大勢いて、お友だちと仲良く遊んだり、勉強のできるところだということを話してあげましょう。

「そんなことでは学校へ行けんぞね」「そんなことをしたら先生におこられるよ」などと子どもに学校生活への恐怖や不安感を持たすことのないように気をつけてください。

「よう出来るようになったね。すごいね―」「さすが一年生になる子は違うね―」などと子どものやったことを認め、ほめてやり、子どもに自信と希望を持たせるように心掛けたいものです。

○　集団生活への準備（学校に合わせた生活リズム）

最近は保育所や幼稚園で集団生活に慣れている子どもがほとんどですが、学校という新しい環境に溶け込んでいくための生活習慣が身についているか、今一度、点検してみましょう。

朝の目覚め、洗顔、歯磨き、朝食、排便、特に大便は登校前にすます習慣をつけておきたいですね。「はい」の返事、あいさつ、自分のことは自分でできる、思っていることがはっきり言えるなど…。

けれども身についていないからといって、入学直前にあれもこれもと焦ると、親も子も落ち着きをなくし、子どもの夢を壊してしまうことになるので、急がず焦らず、親子でじっくり取り組みましょう。

一年間「子育て広場」をお読みくださってありがとうございました。